平成 21 年 2 月

色鉛筆の一色足りぬ春隣

色黒をきはめてをりぬ寒鴉

色白で旨さう白菜の臀部

引力の平等藤の房垂れる

浮寝鳥演出この湖の静寂を

受け売りの話題の続く春愁

牛の尻尾のみぎにひだりに夏めける

薄の字のはづれて庭の初紅葉

嘘つけぬゆえの貧相初鏡

うたた寝のていどに浅く眠る山

腕まくり寄鍋奉行の装束は

エアコンか扇風機かと内輪揉め

枝先の実の重すぎるざくろかな

襟巻に顔を埋没させてゐる

炎天を背負ふ天誅受くるかに

遠来の悴む友を火炙りに

遠雷やうしろ頭のとらへたる

扇にも後期高齢秋扇

滑稽俳句協会ホームページに掲載の記事・写真・イラストなど、
すべてのコンテンツの無断複写・転載等を禁じます。

追へば逃げあの娘(こ)のやうに逃水は

大火事になりたがりゐる焚火かな

大方は大根役者村芝居

大花火瞬間芸の元祖として

おかきなり鏡開きの餅の果て

犯すてふ心地して剪り冬薔薇

お仕置きの百叩に遭ひ干布団

落ち着きのなき虫と生れ天道虫

落ち椿進行形と過去形と

同じ話が再度登場して遅日

鬼叱る顔して撒くや追儺豆

己が尾を咬み襟巻の銀狐

滑稽俳句協会ホームページに掲載の記事・写真・イラストなど、
すべてのコンテンツの無断複写・転載等を禁じます。